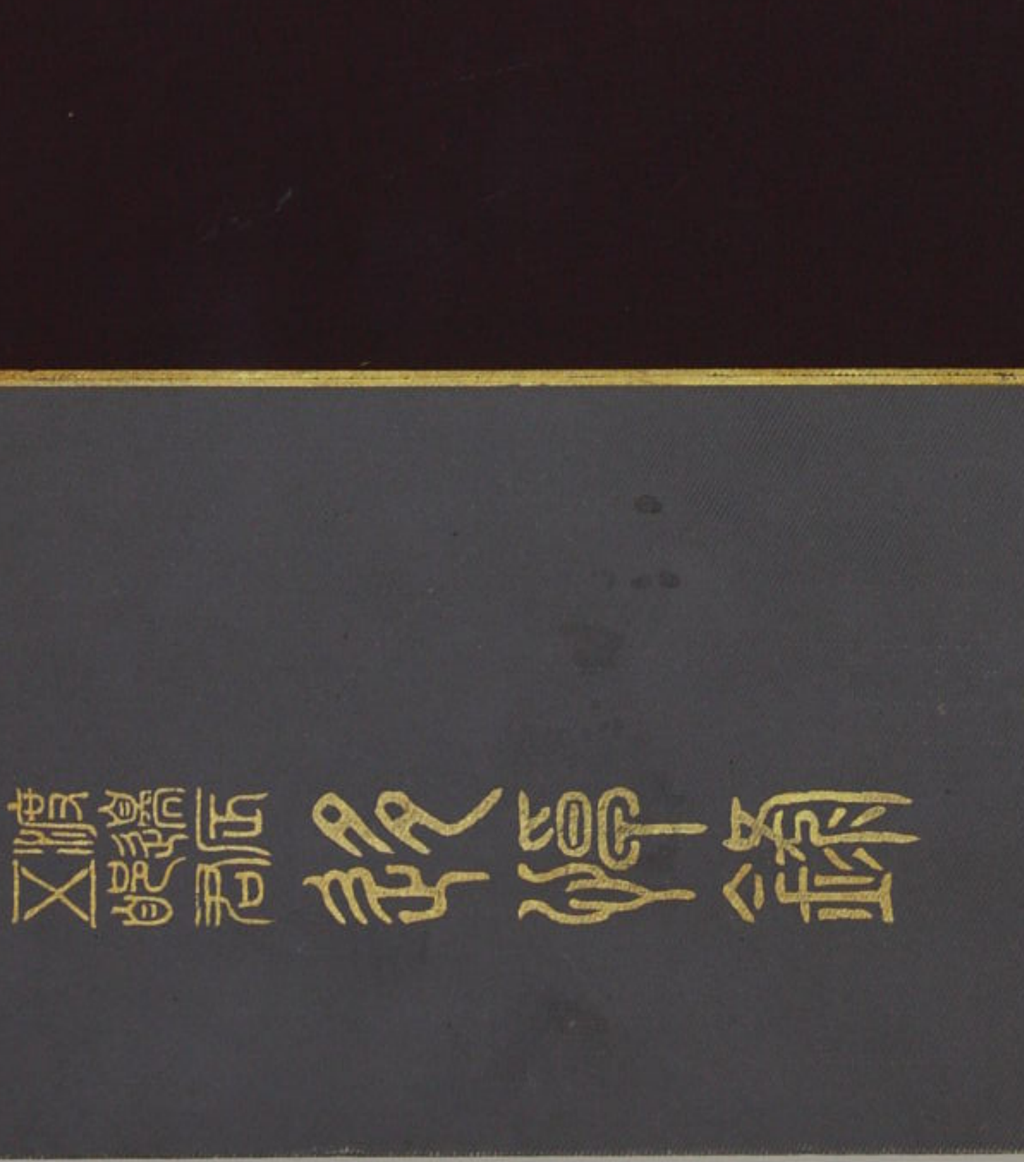
Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

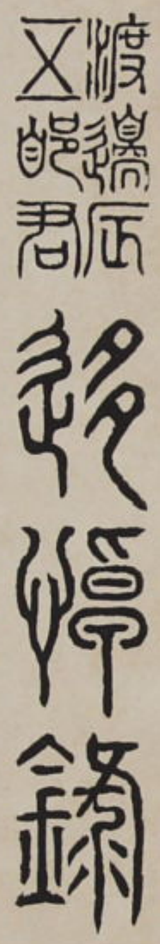
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



說文君篇

後學 錫

渡邊氏又說君 說文解字



載錦徒花女工典型
詞春論夏敎孝子之哀敬

波江滝君先大人追悼詞

成齋[illegible]八十又二[illegible]

裁錦繡花聲女工之典型

初春論夏教孝子之哀敬

波生源君先大人追悼詞

成齋重野安繹時年八十又二

故東京女學校長渡邊五郎君肖像

緒言

わが東京裁縫女學校の前校長渡邊辰五郎先生歿せられてより茲に一年、その間、先輩知人及び門生中より、或は歌を寄せ、或は文を贈りて、弔意を表せられしもの、漸く積みて編を成すに至れり。今、目を立て、類を分ちて、是を輯錄し、添ふるに傳記を以てせるもの、即ち此書なり。

書中、併せ收めたる系圖、逸話等は、編者、自ら先生の鄉里に就て調査し、又年譜の如きは、渡邊家保存の文書及び「裁縫雜誌」の記事並に未亡人邦子刀自の談話等を參照して、是を作成せり。

本書の編纂に就ては、令息渡邊滋君並に坪井理學博士等

より便宜と注意とを與へられたる事少なからず。又卷中挿入の寫眞は、渡邊家所藏の物は勿論、其他小池民次君所藏の物及び中黑實君寄贈の物に依て縮寫せり。なほ表紙圖案は、東京美術學校教授小林萬吾君の意匠に成りたるものなり。

茲に特記して、諸君の厚意を謝す。

明治四十一年五月下旬

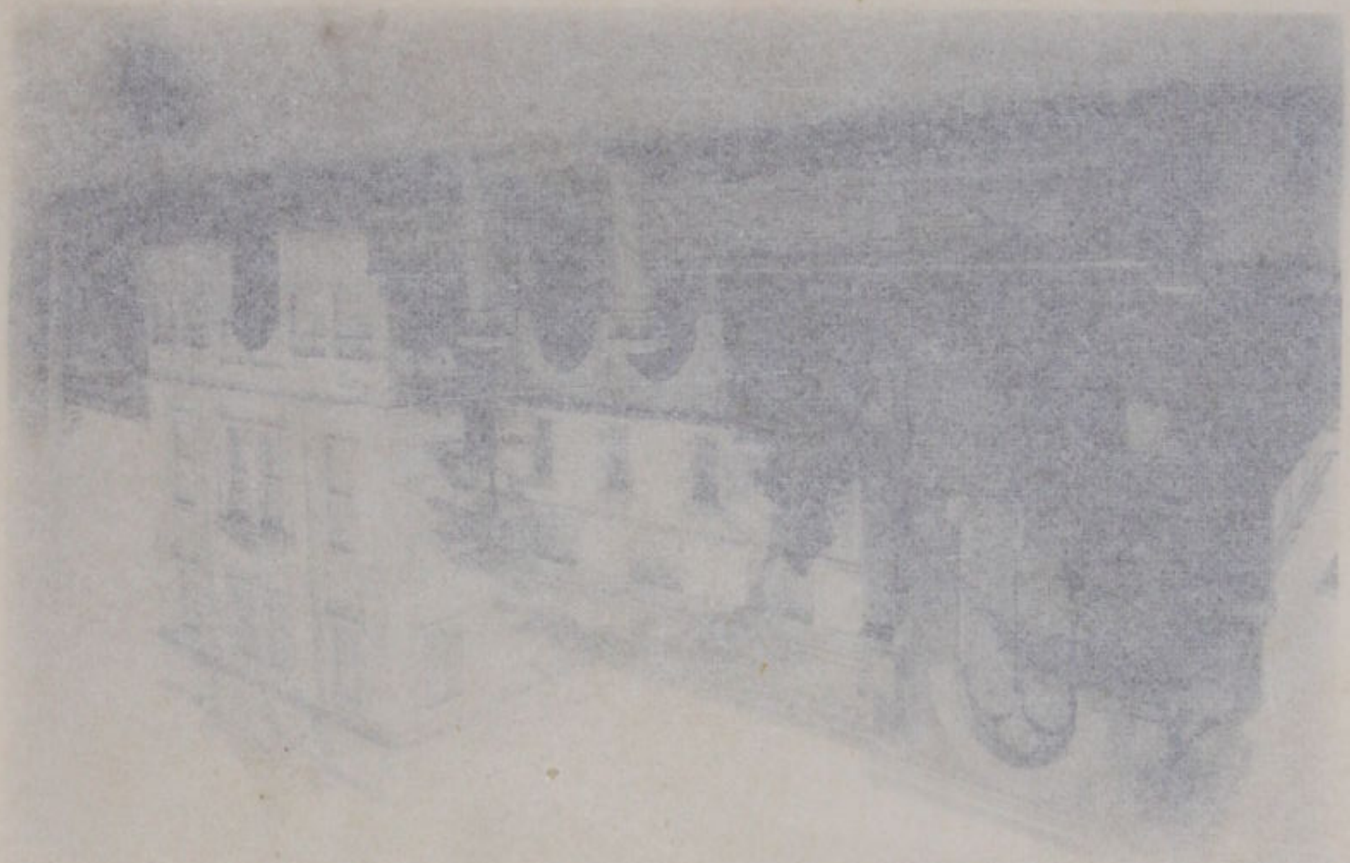
編者　志るす

目次

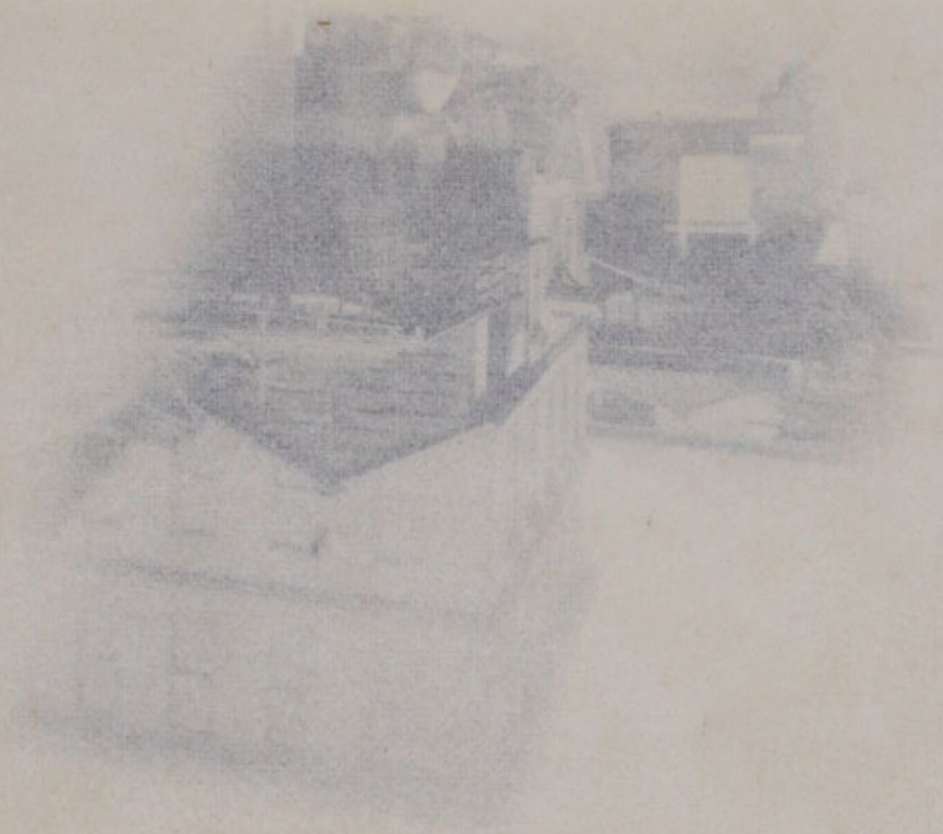
弔詞……一——五二
弔狀……五三——六〇
袖時雨……六一——七四
忍草……七五——九〇
逸話……九一——一二〇
雜感……一二一——一四二
追悼詩歌……一四三——一六八
彙報……一六九——二〇二
傳記……二〇三——二三六
索引……二三七——二四六

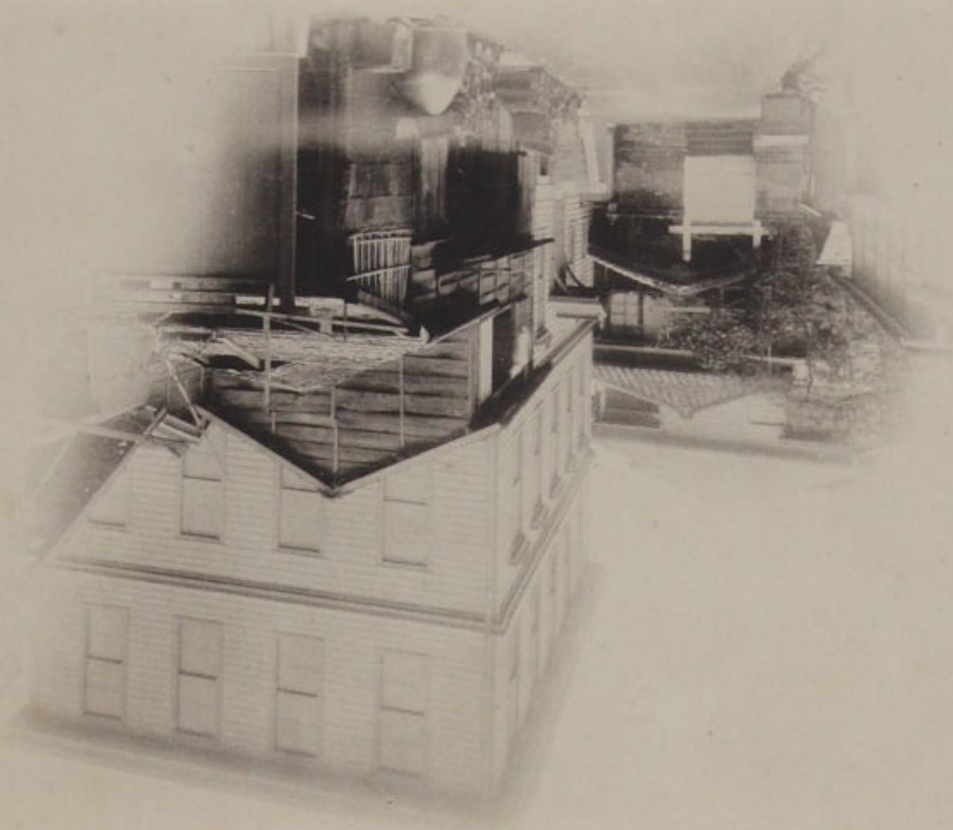
故漢遺民王船山先生銅像

故渡邊長五郎君銅像

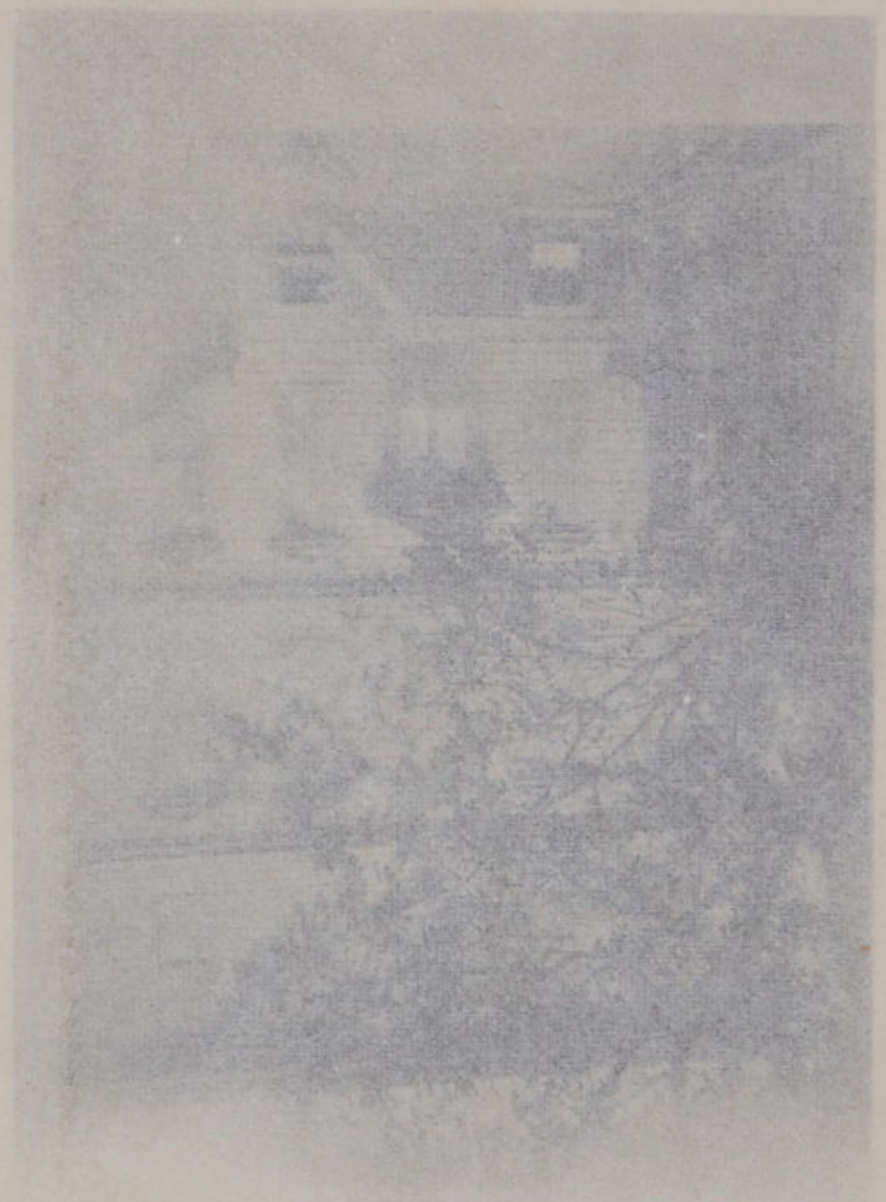


東京裁縫女學校々舍正面

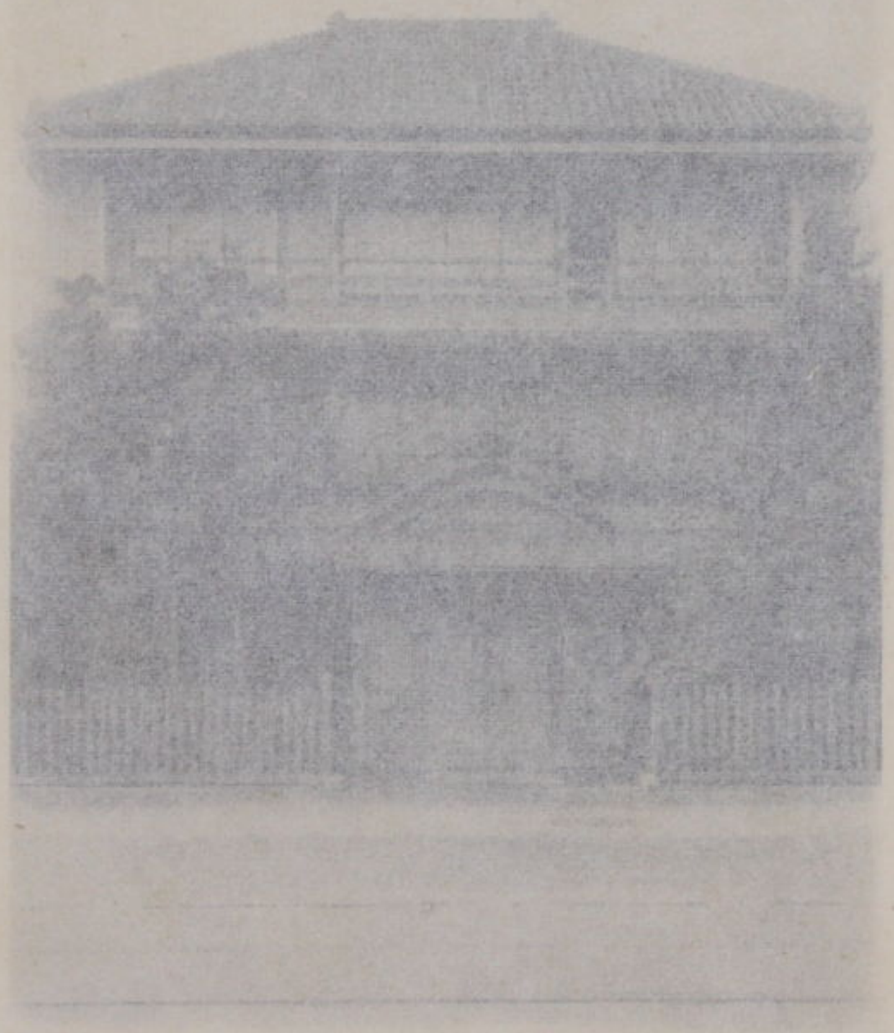




東京女學館教室ノ一部



東京裁縫女學校圖書館正面



東京麻布女學校寄宿舍正面

東京裁縫女學校寄宿舍正面

序詞

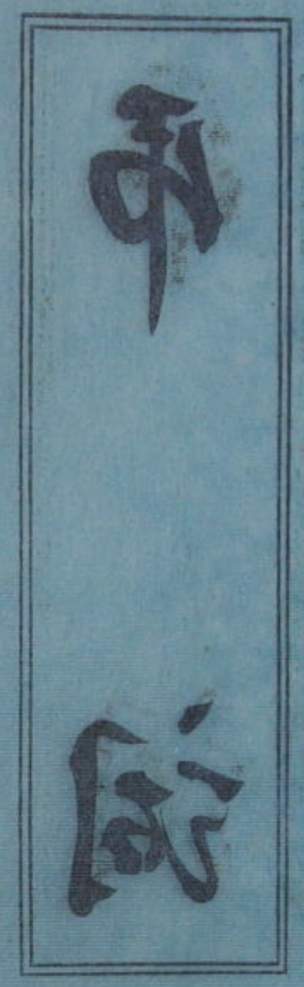
明治二十八年の秋、我が會は創設されしより、年をかさねしことは、年にふゝ及び教を受けし會員の數は四萬を超えたり。此の間は、怪む事なく、たゆむことなく、心をとめ誠をつくして、箴言教授の勞を執られしかば、山の奥海のはてにある女子までも、居ながらにしてよく救ひ縫ひのわざをまねびきはむることを得て、誰もく〳〵よろこびあへりしを、たゞ病のために、本會をすてゝ歸らぬ旅に出立ちたまひしは、海

渡邊辰五郎君追悼錄

弔辭

大日本女學會々長侯爵夫人鍋島榮子、うや〳〵しくしぬびことを述べて、講師渡邊辰五郎ぬしのみたまに告ぐ。

いにし明治二十八年の秋、我が會を開きて、裁縫科の講師を、ぬしによざしゝより、年をかさねしこと、はや十二年におよび、教を受けし會員の數、既に四萬を超えたり。此の間ぬしは、倦む事なく、たゆむことなく、心をこめ誠をつくして、通信教授の勞を執られしかば、山の奥、海のはてにある女子までも、居ながらにしてよく裁ち縫ひのわざをまねびきはむることを得て、誰も〳〵よろこびあへりしを、こたび病のために、本會をすてゝ歸らぬ旅に出立ちたまひしは、洵に惜みても惜みても、なほあまりある事になん。



あはれ、ぬしいまさずなりぬれど、年ごろ教を授けしこゝらの會員たちは、とこしへにぬしのおきてを守り、一領の衣を裁ち、一著の袴を縫ふにも、かならずぬしの恩を思ひて、忘るゝ時なかるべし。

今や、あだかも春夏の衣たちかふる時にあたりて、此の恩師に別れ、此の良講師を失へり。會員等の之を惜み、之を傷む情、ひとしほ深く切ならん、嗚呼、哀哉。

明治四十年六月二日

弔辭

日本赤十字社長　伯爵　松方正義

本社特別社員渡邊辰五郎君ノ遠逝ヲ聞キ、哀悼ノ情ニ堪ヘズ。爰ニ社員百二十五萬人ニ代リ、弔詞ヲ贈ル。

明治四十年六月二日

弔詞

日本體育會長　子爵　加納久宜

本會名譽會員渡邊辰五郎君御逝去ノ訃音ニ接シ、哀悼ノ至リニ堪ヘズ。茲ニ恭シク弔詞ヲ呈ス。

明治四十年五月廿九日

弔辭

本郷區教育會長　理學博士　男爵　菊地大麓

本郷區教育會ハ、終身會員渡邊辰五郎君ノ長逝ヲ哀悼シ、恭シク弔辭ヲ呈ス。

明治四十年六月二日

誄辭

文學博士　那珂通世

今こゝに渡邊君の御葬式に臨みまして、私那珂通世は君と甚舊い好(ヨシ)みがございまするに由つて、皆樣に御代り申して、誄辭(シヌビコト)を陳べまして、君の靈を慰め奉らうと存じます。

君が、御鄕里長南町の小學校で裁縫を敎へて御出の時に、今の山形縣師範學校長江尻庸一郎君は、鶴舞小學校の首席訓導となられまして、君が裁縫敎授の熟練なことを聞いて、明治十一年に、鶴舞へ呼寄せて、敎授を御賴みになりました、その頃裁縫の敎方は、都も鄙も推なべて、順序も無く、課程も定まらず、仕立屋の仕事場と變りがございませんでしたが、裁縫科とても、多數の生徒を集めて規則正しく敎へられると云ふことは、君の敎方で明かになりました。

その年千葉師範校長、即私が、學校の隣に女子師範學校を設けまして、裁縫の敎師には君を鶴舞から御呼び申しました、その女學校は、生徒も幼く、敎師も未熟で、何事も不行屆でございましたが、裁縫の一科だけは、君の御蔭に由つて、慥に天下に秀でた物となりました。

私が、東京女子師範學校に轉じまして後、君の樣な才能ある人を田舍(ヰナカ)に殘し置くことの惜さに、千葉の學校には御氣の毒でしたが、君を東京へ呼出して、明治十四年五月から、官立學校の敎師と致しました。それからして君の敎授法は、四方に赴任する師範卒業生の手によつて、全國の女學校に廣まりましたことは、どなたも御存じの事でございませう。

明治十九年の春、通世が非職になりました時に、君もその外二三の敎員も、何故か同時に罷めさせられましたが、そのよされた連中が集りまして、それに服部一三、手島精一、永井久一郎、中川謙二郎の

諸君と學校に殘つて居る女教員たちとが加はりまして、共立女子職業學校を設けました。女子に職業を授けると云ふ趣意は、至極宜いけれども、實地に手仕事を教へることに熟練した教師は少くて、初はどの仕事も、墓々しくは參りませんでしたが、君の御夫婦の御盡力によつて、裁縫科だけは、初から盛になりまして、教授法管理法の行屆いたことは、恐らくは官立の高等女學校も女子師範學校も及ばなかつただらうと思はれます。今あの學校が、あの通りに盛大になりましたのは、實に君の御夫婦の御盡力に基いたのでございます。

君は、また職業學校に盡力せられる傍に、本郷東竹町二十五番地の自宅(今の京華中學校の所)でも教授して居られたが、追々生徒もふゑて、手廻りかねるによつて、二十九年に職業學校を御斷りになつて、自宅の教授、即東京裁縫女學校の事業に全力を注がせられ、女

子に必要な他の諸學科も加へられ、三十二年に今の校舍を新築せられてからは、學校の規則も益々整ひ、生徒は彌が上に增加して、遂に天下の裁縫學校の本山とも申すべき盛大な學校となりました。

これだけの履歴、ごく簡畧な履歴を有のまゝに陳べて見ますれば、別に訣ひらしい讃辭などを申さんでも、君の成功の著しい事が分ります。かやうな成功は、何に基いたかと申しますれば、君が善く誠の心と、君が善く勉められた事と二つから出でたのに過ぎません。實につとめとまこと、勤勉と誠實、この二つの力は、恐ろしいものでございます。殊に君は貧家に御生れなされ、御若い時は十年の年季奉公に身を苦められたことは、兼々君から承りましたが、さやうな貧苦の中で戰ひ續けて、遂に今日の勝利の冠を戴かれるに至る迄の御辛抱は、決して容易なことではございません。その御辛抱の出來たのは、全く始終誠實を以て一心を貫いて御出でであつたから

てございませう。

して見れば、君の事業は、幾千人の生徒を直接に教へて幸ひを與へられたばかりでなく、間接には學者教育家實業家などの善い手本となり、また貧書生苦學生などの爲には、どれほどの勵ましとも慰めとも爲るか知れません。天下の苦學生だち、決して失望してはいかん。君の風を聞いて奮發勉强すべきである。

今君の勤勉誠實の效は大に著はれまして、學校の土臺は既に、固まつて動きのない上に、御子樣方や恩顧の御門人たちで、君の事業を引續けるには十分でございますから、譽れを身に負うてこの世を御去りなされた君には、思ひ殘される樣なことは更にございませず、羨ましいほど御安心な御最期でございます。御自分にも定めし御滿足に思召されたでございませう。

併ながら君が、生徒に對する慈愛の心の博く深く厚いことは、尋常の比ひではございません。四千人の卒業生、千人の在學生を盡く我が子の樣に思うて御出なされた程で、それらを只教へて遣つたばかりでは滿足せられず、それらの成立出世を御覽になることを何よりの樂みとして御出であつたから、まだ十年も二十年も長らへて、五千の門生の行末までも見屆けたいと云ふ欲心を持つて御出だつたらうと思はれます。然るを遽の御病氣の爲に、その事の叶はぬ樣になられたのは、いかほど御殘念でありましたらうか。それを考へますれば、我々も實に殘念で……　あゝ悲しいかな。悔しいかな。

明治四十年六月二日

渡邊翁ノ遠逝ヲ悼ム

東京高等工業學校長　手島精一

翁ハ明治ノ初年ニ於テ、裁縫ノ技モ亦、女子ニ必須ナル課業ノ一

ト爲シ、或ハ裁縫ノ技術ヲ幾千ノ女子ニ教授シ、或ハ書ヲ著ハシテ斯業ノ秩序的發達ヲ計リ、以テ世益ヲ效シタルコト偉大ナリトス。而シテ世ハ生活程度ノ高尚シタルト共ニ、衣服ノ裁縫ハ益々需要ヲ增スニ至レリ。若シ翁微セバ、現今ノ如ク需要ト供給トノ併進ヲ期スルコト難シ、實ニ翁ハ先見ノ明アル人ナリ。又育英事業ニ關シテハ懇切ニシテ倦ムコトナク、世間幾千ノ女子ハ、爲メニ或ハ自家ニ於テ其本分ヲ盡スコトヲ得、或ハ世ニ獨立スルヲ得タルハ、皆是レ翁ノ賜ニ非ラズシテ何ゾヤ。今ヤ翁逝ケリ、親シク教ヲ受クルコト能ハザルハ、世ノ爲メニ深ク之ヲ惜ムト雖モ、幸ニ翁ノ薫育ニ浴シタル幾千ノ女子ハ、翁ヨリ受ケタリシ技ヲ後世ニ傳ヘントス、翁夫レ意ヲ安ンゼヨ。茲ニ翁ノ遠逝ヲ悼ミ、聊カ追悼ノ蕪辭ヲ述ブ。

弔辭

仙臺高等工業學校長　中川謙二郎

回顧スレバ、今ヲ距ルコト二十有餘年、御茶ノ水ニ、一ツ橋ニ渡邊辰五郎君ト裁縫教授ニ關シテ意見ヲ交換シ、時ニ意見ヲ異ニシテ、論戰花ヲ咲カセタルコトアリシガ、君ハ初志ヲ一貫シテ裁縫教授ニ力ヲ盡サレ我國女子技藝教育上ニ貢獻セラレタルコト大ニシテ、其効績實ニ顯著ナリ。今ヤ君、天ニ在リテ、人間界ノ活動ヲ止ム。余ハ論戰ノ對手ヲ失ヒ、女子技藝教育界ハ明星ヲ失フ。ア、、天ナルカナ、命ナルカ。

弔辭

千葉縣教育會長　里村勝太郎

本會ハ終身會員渡邊辰五郎君ノ逝去セラレタルヲ哀悼シ、茲ニ

恭シク弔辭ヲ呈ス。

明治四十年五月二十九日

故渡邊大人を追弔す

文學士　常盤大定

一寸の針に志を立て、一丁の鋏に身を起し、以て斯道の大業を成就し不朽の芳名を殘せるは、故渡邊大人なり。大人は實驗の人なりき、工夫の人なりき。千艱萬難の中に於ける實驗工夫は、遂に大人を玉成せるなり。大人の事を處するや、一に誠意を以てし、人に對するや亦誠心を以て貫けり。事を處するに誠意なり、故に周到綿密些事といへども苟くもせずこれ一寸の針に運用の妙を極めて、斯道の泰斗たるに至りし所以なり。人に對して誠心なり、故に丁寧親切指導の宜しきを得以て一個の私塾を進歩發達せしめて、魏然たる學

校を創設せる所以なり。予乏しきを以て職を本校に奉ずる、五年の久しきに亘り、此間つら〳〵大人の施設を見るに、故を捨てずして而も新を取らんとするの意氣頗る猛に、加ふるに應用の才あり、計畫の技あり、終始事を究めて樂みを這裡に求め、朝夕人を教へて老の身に迫るを忘るゝものありき。是を以て、生徒の大人に於けるや、師に對するの敬に加ふるに、父に對するの愛を以てし、教場を巡視せらるゝ大人の影を見るや、爭つてその指示を得んとし、一たびその指示に遇ふや、片言隻語の中に、偉大の教訓を得るを常とせりといふ。

今は三年の昔となりぬる秋季、茸狩の遠足を總州八街の野に催されたる事ありき。天高く、氣澄み、郊外の秋色都門の塵懷を脱せしむるものあり。一千の兒女嬉々として彼に跳り、此に走り、大人亦これに同化して、東西に周旋し、興味未だ半ばにも達せずして、早くも

歸京の途に上れる車窓の中、一千の兒女皆恩師の膝下に一日の清遊を得たるを喜び、迦陵頻伽の聲を擧げて、同音以て唱歌をうたふ。大人老軀を忘れ、進行動搖する車中を遍ねく一往復して、一千の兒女を巡覽し來り、腰を下す間もなく、いそ〳〵として再度の往復を爲し、須臾にしてまた第三の往復を爲せる、その時の面容彷彿として、今猶予が眼前にあり。此時に於ける大人の胸臆幾何の快愉に充ちたりけん。越えて二年、昨年二月なりしと覺ゆ。鎌倉の別墅に教職員の親睦會を開かれし時、大人頗る衰頽の色深く、之を八街の時に比すれば、霄壤の差あり、予は不祥にも心中私に大人が前途の長からざるべきを思ひ、そゞろに悲哀の感を催せる事ありき。果して此年の五月、遂に幽冥處を異にし、中原復呼べども應へざるに至りぬ。さはれ、谷中の葬場や、親炙を受けし教へ子の、百里を遠しとせずして來れるもの、數ふるに遑あらず、皆この最終の式典に列し、聲を呑

んで、一片の燒香に堪へぬ悲愁を遺り、教員の一人起ちて弔辭を讀むや、嘘欷嗚咽の聲四方に響き、中には慟哭して仆れんとするものあり。大人一たび地下に就くや、その墓前忽ちにして華筒捧げられ、燈籠立ち、鐵柵の廻るを見たり。以て大人の德化の偉大なるを卜するに足る。大人また以て瞑すべきなり。

故渡邊辰五郎先生追悼の辭

東京盲啞學校教諭　石川倉次

榮枯生死は自然の運命ではあるが、人の力によつては、或はその幾分をば左右し得られる。けれども、到底、枯死をまぬかれさせることはできぬのである。すでに、およぶ限りの人事を盡したるも、時來りて逝きたる人は、くやめどもかへらず。われ〳〵も、いつしか、先生とおなじく、眞の無我の樂園に永眠する時の來るのである。世に偉

功をたてたる人の歸らずならられたほど、悼ましく惜しきはなきに、先生はわが日本の裁縫界に廣く偉功を施されたる方である上に、先生はわが妻の恩師で、且つわれらえにしの仲人であつた。それらおもへばおもふほど、われらが哀悼のこゝろのいと切なるは、御親族の方々にも劣りはすまいと思はれます。順天堂に御療養の折、妻と共に御見舞申して、そちこち、なでたりさすつたりしてあげたるに、「上手だね、あゝいゝこゝろもちだ。盲唖學校に居るだけあつて、二人とも上手だ」など申され、また御親族の方々が、すでにいく度もきよくふかれてある御足をのべて、「だるいから、ふいてください」と申されるゆゑ、あるこーるつけてあげれば、「ありがたいな、足までふいてもらつて」と申され、この病氣が直つたら、鎌倉の別莊に隱居するから、子供しゆつれて遊びにおいてなさい」など、どこまでも慈愛の御言葉。これが遂に永きおわかれごととなつたかと、おもへばおもふほど、おなづかしく、いたはしく、かなしみても、くやみても、かへらぬこととは知りながら、まことに、悼はしく、哀しきことのかぎりにこそ。

同夫人　石川さの子

○

とりわきてあつきめぐみをうけし身の
　むかし忍びてなかぬ日もなし。
たらちねの親にわかれしこゝちして
　かなしきふしのおほくもあるかな

故渡邊辰五郎先生を追悼す

千葉縣東金高等女學校長
兼千葉高等女學校教諭　小池民次

故渡邊辰五郎先生ハ明治の偉人であつて、全國の女子が先生の薫陶を受けたのである。先生の薫陶を受けた女子が、各家庭に於て

其の働を顯したばかりではなくて、大小公私の樣々の女學校に教鞭を執つて、無數の孫弟子を作つた者も少くはない。之が內地ばかりではなくて、清韓各地の海外にも及んだのである。昔は伊藤仁齋先生が京都の堀川に學校を設けて子弟を教育せられた時、壹岐、佐渡、對馬の三國を除き、其の他の國からは生徒の來ない處は無かつたと云ふことであるけれども、渡邊辰五郎先生の門には、全國何れの隅々よりも來ない處はなく、遠い臺灣、琉球の邊からも、遙々と推しかけて來たのであるから、仁齋先生よりも數倍の弟子があつたのである。或る人は明治の御代なればこそ、古來比類の無い程の弟子が集つたのであると云つたけれども、學校を設けて生徒を募集するものは到る處にある。それでも生徒は容易に集らない、終には維持が出來なくなつて、閉校するものも少くない。然るに先生の學校では、生徒を募集する廣告をしないけれども、推しかけて來るのを斷るのに骨が折れたのである。是れは先生の技術の非凡であつたばかりでは無い、實に其の德望の然らしむる處であつた。然るに斯る偉人も、天命は如何ともすることが出來ないので、本年五月二十六日を以て、歸らぬ旅に赴かれたのは、誠に痛惜の情に堪へないことである。

余が初めて先生を知つたのは、明治十二年の夏、上總國廳南町の先生の家を訪うた時であつた。余が千葉師範學校の教師となつた時に、先生は女子師範學校の教師であつたが、寐ても寤めても裁縫の教授法に研究を凝らされるので、余は交際の深くなるに從つて益々敬慕の念を加へた、しかのみならず、女子の性格を養成することに就ても、驚くべき注意を拂つた。尙其の注意がよく實際に適合したことには深く感服した。

先生は廳南町に居た時も、堂々たる帝都の巨大なる學校の校長

となつて、其の門下から全國の女學校の裁縫教師を出すようになつてからも、舊知友人に對する態度が少しも變らなんだ。

昨年の夏、余が訪問した時には恰も寄宿舍を擴張した際であつたから、自ら全部を案内して見せて呉れられた。其の際余は、先生に「此のような大校舍を建てゝ、帝都に一の壯觀を添へようと云ふことを、初めから工夫せられたか」と尋ねた。すると「否とよ、其のような積りはなかつたが、斯くなつたのは知友諸君の賜ものて、運がよいのである」と云はれて、深く謙遜せられた。

先生は職員數十名、生徒常に千人内外なる東京裁縫女學校の校長として立つてゐても、其の職員は一人として、校長に頭を押へられて居ると感じたものはない。去りとて一人も校長を輕蔑するものはない、細大となく校長の意を承けて、快く働くから、校長の意志は全校に貫徹した。是れは先生に統率の才が有つたばかりてはない、其の德化の然らしむる處であつた。

先生は散歩しても旅行しても、見る物聞くものに就て、知識技能を練磨するの材料とせられた。或る時、余に「上野公園を散歩して、某婦人の服裝の如何にも質素なれども、品格を保つ上に手本とすべきものを見た」と云はれ、又婦人の歩き振りなどを見て、「あのような態度では、兎角輕蔑を受けるものであるから、生徒にも心付けて置きたい」と云はれたこともある。又或る時、「男からいへば女は魔物だが、女から云へば男は魔物である。千人に近い生徒であるから、往々心得違ひのものも無いではないが、懇々說諭すれば多くは改心するけれども、惡るい男の附いてゐるものは改まらぬ」と云はれたから、余は如何にもと合點した。

先生は如何にも溫厚で、家族に對しても曾て勵聲叱咤したことがない。生徒の過失を認めて說諭する場合にも、身を生徒の位置に

下して、十分の同情を注ぐから、説諭を受けるものが身に染みて感動した。縫ひ方裁ち方などに就て同じことを忘れて、二度も三度も質問するものがあれば、幾度でも初めてと同じように説明して聞かせる。先生は「何度でも質問する位のものは頼もしい、分つた振りをしてごまかすのがいけない」と云はれた。

本年五月十八日の夜に二通の郵便が屆いた。一は先生の長男滋君より、一は石川倉次君より出たもので、共に先生の重症に罹つたことゝ、生前に余に面會したいと云ふ本人の希望であると云ふことが書いてある。余は翌朝第一番の列車で上京して、順天堂の病室に見舞つた。先生は非常に悦んで、余の手を堅く握つた、半時間以上も離さなかつた。余の見舞つた前日に、平生親しい仲であつた那珂通世先生をはじめ、手島精一、坪井正五郎、小西信八、多田房之輔、石川倉次の諸君にも來て貰つて、懇に告別をせられた。告別の辭は何れ

も大同小異であつたらしいが、病み疲れた先生の口より、余の聽いたのは、大要左の如くであつた。

君に告別しないで死ぬのは遺憾と思つたが、遠方から來て吳れて有がたい。僕はするだけの事をしたから、微笑して死ぬ。家の事にも心配はない、子息も善良なもので勉強もするから、學校の方も差支はないが、尙年が若いから心添を頼む。君は益々自愛して活動し給へ。誠心を以て活動すれば往生が苦勞にならぬものである。僕は微笑して死ぬから、君の按摩術で僕の脊を撫てゝ吳れ給へ……嗚呼好い心持だ……、

それで睡眠に就かれたから、余は脈搏を按じ、皮膚の色を窺ふに、尙死期に迫つたとは思はれないから、成るべく安靜を妨げないようにして辭し去つた。二十六日に「チヽキトク」との電報に接したから、再び上京して病床に見舞つた。此の時は既に婚睡に陷て……殘

餘の呼吸を認めるのであつたが、顏面には怡樂の相が見えた。やがて刻一刻に賴み少くなつて、愛孃薫子の君の双腕に抱かれながら、令閨、令息を始め、兒孫の熱誠を籠められた唯無言の……呼吸の音をも聽き取り得べき無言寂靜の間に、溘焉として此の偉人は、白玉樓中の人となつた。

余は葬儀の前夜、先生の靈前に向つて、侍僧の讀經の間に左の事を告白した。先生が生前に余に告別せられた時には、必ず快復するであらうと思つて、何とも云はなかつたことを悔いたからである。

私は最初御見舞をした時、斯くも幽明を隔てようとは信じなかつた。今となつては痛惜に堪へないのみならず、告別の御言葉に對して、何も御答をしなかつたのを、濟まないことゝ存じます。我が日本の裁縫教授法は、先生の手に依て生れたので、小學校に裁縫の課目が加へられ、先生の教授法が行はれた爲に、女子の就學

餘の呼吸を認めるのであつたが、顏面には怡樂の相が見えた。やがて刻一刻に組み少くなつて、愛嬢濱子の君の双眸に抱かれながら、令閨、令息を給め、兒孫の熱誠を感められた唯無言の　　呼吸の音をも聽き取り得べき無言寂靜の間に、滂沱として此の偉人は、白玉樓中の人となつた。

余は葬儀の前夜、先生の靈前に向つて、侍僧の讀經の間に左の事を告白した。先生が生前に余に告別せられた時には、必ず快復するであらうと思つて、何とも云はなかつたことを悔いたからである。

私は最初御見舞をした時、斯くも幽明を隔てようとは信じなかつた。今となつては痛惜に堪へないのみならず、告別の御言葉に對して、何も御答をしなかつたのを濟まないことゝ存じます。我が日本の教育教授法は、先生の手に依て生れたので、小學校に教鞭の器具が加へられ、先生の教授法が行はれた爲に、女子の教育

圖の若山郎五兵邊渡校

も頗る多くなつたのでありますから、先生が一般の女子教育に施した恩惠は洪大でありまず。全國の津々浦々に至るまで、先生の門下に入らぬものはなく、內國は勿論、支那、朝鮮に至るまで、先生の門下より出たものが女學校の教鞭を執つてゐる。先生は古來比類の少い一大偉人であることを疑ひません。今や先生は此の世を去つて、謦咳に接することは出來ないけれども、先生の靈魂は此の渡邊家に留り、此の學校に留り、社會の女子教育の上に留つて、其の進歩發達を助けられることでありませう。特に令息は天資鋭敏、裁縫の技術を多年歐米の先進國に學ばれ、令孃亦技能に拔群にして、教壇に立つて既に令聞を得て居られまするし、加ふるに那珂先生、坪井先生をはじめ、著名の士君子の後援もありまするから、令息令孃の德聖と相待て、校運も益々盛大に赴いて、先生の御志も愈々社會に普及することでありませう。未熟な

私を最も能く知つて下さつたのは先生でありますから、私も先生の御志の愈々社會に普及するようにと祈る心は、敢て人後に落ちない積りであります。先生は御臨終に際して十分の御安心があつたことを信じまするが、私は御生前に申上たく思つたことを、茲に尊靈に對し奉つて告白いたします。

斯くて葬儀は翌日を以て谷中の齋場に行はれた。柩の過ぐる所行人の脱帽して先生の柩に敬禮するものもあつたが、是は先生の銘旗が眼についたからであらう。

嗚呼先生の肉體は、復び之を見ることが出來ないけれども、先生の世に傳へられた技術や知識は、永久に世に行はれ、先生の德風は洽ねく同胞に及んで、盡くることのない生命となることを信ずるのである。先生の溫乎たる言動に接することの出來ないのは、悲しき限りであるけれども、是は浮世の常であるから、誠に止むを得なことである。（明治四十年七月稿）

偉人を弔す

大農園主筆　新治韜堂

▲偉人傑士を戰場にのみ、求むるは、東洋古今の通弊なり。豈に東郷大將のみ、世の偉人なる業をなすものならんや。

▲偉人傑士、豈に政界にのみ限らんや。而も東洋人はこれを他に求めざるは何ぞや。西郷、大久保諸公のみ世の偉大なる業をなせりとすべけんや。

▲東郷や、西郷や、將た大久保や、國家に貢獻する所、果して偉大なりしならむ。而も吾人に直接なる衣食住に關して、直接に何等の改良をかなせる、直接に何等の工夫をかなせる。

▲渡邊翁は衣服界の偉人也、傑士也。吾人に最直接なる利便を與へ

たる人也。

▲人生に直接なる利便を與へたる點に於ては、遙に東郷以上なり。西郷、大久保、以上也。

▲今の世はクダラヌ論文に博士の學位を授くる世也。而して翁の如き極めて眞面目に世を益せし人には、何物をも授けざる世の中也。

▲翁が人生に益せしは、三文文士、屁鉾博士に比すべくもあらず。而も世は生前に何物をも翁に報いざりき。

▲偉人の事業、赫々たるハデなるもの而已ならんや。翁がジミなる一本の針は、東郷の劍に比して、豈に遜色あらんや。

▲翁が裁縫書は、裁縫界の經典なり。其の價値、西郷、大久保を飾る維新の歴史に比して、劣るものにあらざる也。

▲翁の後に更に勝れたる裁縫書を著はすものあらん。而も翁の以

前に溯りて、翁の功を奪ふ能はざらむ。後に謂ふは易く、前に謂ふは難し。

▲翁の直接の薫陶を蒙るもの、蓋し幾千。而して枝より枝を生じ、間接の教を受くるものは、其の幾十百萬なるを知らざらむ。否新らしき衣服を縫ふ婦人、少女にして、幾分にても翁の改良の恩澤に浴せざるものは殆どこれなからむ。

▲加之、翁の畢世の事業は、盡く立志篇中の事業也。記して世と後に傳へば、必ずや見て以て、奮發興起するものあらむ。好鑑也。

▲翁、今や良嗣あり。溘焉逝くも以て瞑すべく、天は紫雲を垂れてこれを迎へむ。

▲嗚呼、翁逝けり。翁は人として成すべき事を成せり矣。

渡邊辰五郎先生の早世を悼む

東京貯蓄銀行青山支店長　横山德次郎

天下の人士、先生の早世を悼むもの、豈に啻に、予一人のみならんや。何となれば、先生は、千葉縣の人にして、千葉縣の人にあらず。亦東京の人にして、東京の人にあらず。則ち日本唯一の人なればなり。されば、先生を知るものは勿論、たとひ先生を知らざるものと雖も、此の日本唯一の先生を喪ひては、誰か之を哀悼せざるものぞ。況んや予の如き、先生の知遇を辱うせしものに於てをや。

予、先生の早世を聞きて、痛嘆の情、悼惜の念禁ぜず、萬斛の血涙、胸臆に滂沱たりと雖も。之を口にし、之を文にして、其の情念の萬一だも、發表すること能はずと雖も、胸底の哀情は、決して、人に讓らざるを自覺せり。此時に際して、先生の追悼錄編纂の美擧あるを聞き、欽歡に堪へず。聊か不文一篇を草して、卷末併載の榮を頒たられんことを望む。然りと雖も、先生の偉德嘉言善行に至りては、之を叙する人々極めて多かるべく、予が、敢て云爲すべきところにあらざるを信ずるを以て、予は唯、予一人の感ずるところを陳べて、以て追悼の萬一を表せんと欲す。

予が、明治廿七八年の交、岐阜市高等小學校長の職を奉ぜし頃は、教育の事業、今日の如く盛んならず、從ひて、兒童の就學、亦今日のごとくならず、殊に女兒の就學者は、極めて少なく、眞に、晨星寥々の感なくんばあらざりき。當時予、私かに思へらく、女兒の就學を奬勵するの道、少なからずと雖も、先づ裁縫教授の方法を改善するより急なるものなきを信じ、其の改良研究の手段として、當時、裁縫教授に特色ある地方の教授方法を取調べんと欲し、北は仙臺朴澤先生の松操塾に遊び、南は、熊本の尙絅黌舍を訪ひ、其の他、岡山に、堺に、苟も

裁縫教授に、令名ある地方を巡歴して、大に改良上、參考となるべきものあるを發見したり。當時、先生は、共立女子職業學校に在職せられ、專ら裁縫教授に關して、研究調査上、頗る改喜の意見を包藏せらるゝを聞き、就きて、其の所見を叩きたり。是れ、予が、先生の溫容に浴し、先生の警咳に鎔せられし初なり。

當時、先生は、業に己に、裁縫教授の改善に深く着目せられ、其の方法としては、自己研究の方法を、遍く一般の女兒に傳導し、且つ、裁縫教授の任に當るべき女教員養成の、極めて切要なるとを信ぜられ、遂に、東京裁縫女學校を創立せられたり。爾來、先生が生を終ふるまで、同校の改善發達に、幾多の苦辛慘憺を嘗められしかは、是れ、天下の人々の熟知せるところ、敢て、叙説を要せざるなり。此の間に於て先生は、幾千人の女兒を教育し、又數多の裁縫教員を養成せられたり。今や、全國到る處の女子師範學校、高等女學校、其他各種の女子技

藝學校は、云ふに及ばず、全國の小學校と雖も、先生の弟子たりしもの、若くは、孫弟子、彥弟子たるものゝ指頭に據りて、裁縫技藝の教授は、學ばれつゝあるにあらずや。されば、全國、誰か先生の名を聞かざるもの、誰か先生の著書を見ざる者、誰か先生の餘光に浴せざるものあらん。是れ、予が、先生を敬ひて、日本唯一の先生と稱する所以なり。されば、先生の早世を聞知して、哀悼の情を起さゞるもの、豈に予一人のみならんやと、謂ふ所以なり。

其れ、死は人生の最も悲むべき所のもの、されば、骨肉、親戚、朋友、知人の之を悲むべきは、たとひ匹夫匹婦の死と雖も、敢て珍とするにたらず。然るに、先生の如きに至りては、實に、其れ然らんや。天下の人々、其の知ると知らざるを問はず、異人同情に其の早世を悲むもの其數擧げて數ふべからず。嗚呼先生の偉德、何ぞ其れ廣大無邊なるや。予は、殆ど、その云はんとするところを知らざるなり。加之、先生の

溫容は、去りて影なく、先生の清音は、消えて跡なしと雖も、先生の事業は、後續者其人に因りて、隆々其の盛を致し、規模益々宏壯を極め、訓育愈々改善を見るは勿論、天下至る處に於て、先生無形の溫容は見られ得べく、先生無聲の清音は聞かれ得べし。嗚呼、先生の偉德何ぞ其れ廣大無邊なるや。先生は早世なりと雖も、決して早世にあらず。先生、死滅せりと雖も、決して死滅せられしにあらず。先生の偉大なる功德は、遍く天下に根底を有し、益々、成長發達をなしつゝあるにあらざるなきを得んや。

嗚呼、偉なる哉、嗚呼、大なる哉。語に曰く、偉人は永久不滅なりと、予は先生に於て眞に其の然るを見る。是に於てか予は信ず、敎育者たるものゝ眞正の趣味は、天下殆ど無比なることを。予先生を敬慕哀悼するの情、益々切にして、愈々深し。紅涙迸り出でゝ亦筆を執る能はざるに至れり。嗟吁、哀しい哉。嗟吁、悼ましい哉。

丁未秋、雨寂寥の夕、東都青山客窓の下にて、敬書

噫渡邊辰五郎先生

名古屋裁縫女學校長　椙山正弥

今茲五月將に暮れんとするの夕、杜宇血を吐きて頻りに啼く、忽ち訃音あり、先生易簀すと、嗚呼果して眞乎。余の先生に於ける、たゞに師父の鴻恩あるのみにあらずして、言ふべからざるの誼あり。今やこの悲報に接し、茫然爲す所を知らず、徒に百里の外に慟哭絕叫して、その病褥に侍する能はざりしを恨む。噫、溫乎たる容姿、蕭然たる威風、能く幾萬の女子を誘掖し、無慮の賢秀を薫陶し、天下幾多の女性をして、その婦道を完からしめしもの、實に先生にあらずして、誰か之を能くせん。惟ふに先生、幼よりあらゆる辛酸を嘗め、夙に斯道のために心を碎き、日夜孜々として懈らず、晩年體漸く衰ふるも、尙

ほ勉めて教鞭を執り、營々として教へて倦まず、是れ先生の命を比較的短からしめたる一因には非ざるか。嗚呼先生、今や逝去せらる、春鶯秋燕幾たび去來するも、再び先生の音容に接する能はず、悲しい哉、然りと雖も、先生の偉業功績は、傳へて天壤と窮りなく、先生の令名は、炳乎として千歳に煌燿たらん、先生亦以て瞑すべきか、斷腸のあまり一言蕪辭を草して、謹て先生を弔ふ。

大渡邊先生を憶ふ

房總文壇主筆　加瀬哲

故渡邊辰五郎先生は、我が女子教育界の恩師なり。明治の初頭、單身上總の廳南より出で、赤手空拳もて碩なる實業の教育を企て、而して眞の大成功を王城の中央に築き上げたる巨人なり。先生の爲人は、慕ふべく則るべく、先生の事業は、敬すべく傳ふべし。虚僞假相恃み少き塵世に、金力以外、權勢以外、別に一個の活手腕もて、鋭意開拓すべき大なる成功の秘義あることを切實に後昆に示し給へり。卓落不羈は先生の信條にして、獨立自營は先生の宗旨なりき。躬自ら深奥の學を修め、今日謂ふ所の高等の教育を受けたるにあらず。而かも聰明の識、よく時代の要求に率先し、英邁の資、身を挺て、我が國私立裁縫女學校のオーソリチーを致したる、巨人にあらずして何ぞや。貴族的我國の風習として、由來裁縫の業を賤み、婦女子の末技として、由なく輕んぜられたるもの、之を尋常人の手に委せんか、事變らず針小の末技たるべかりしを、適〻先生の熱誠と靈腕とに依りて、俄然棒大せられたる其事業其貢獻、豈に非凡の事にあらずや。爾り先生は、明治の巨人なり、少くとも關左半島の誇となすべき偉人なり。胸中萬卷の書を藏し、滿腔の經綸も施すに便なく、可惜らスキ腹を抱いて、空しく不平を洩す者、先生の爲人を聽いて、氣死して

可なり。近時小森松風君、先生の追悼錄を輯むと聞き、己また半島に生を享け、先生の從弟松本氏(順一郎君)を識れるの所緣を奇貨とし、人がましく玆に教育界の恩師、明治の巨人を追悼するの選に入れるは、余の光榮とする處、即ち拙き水莖の跡をも省みず、故先生が叔父君に渡らせ給ふ—今は齊しく故人なれども—松本市造氏(順一郎の父君)其人の語りし譚なりといふ先生の事どもを、慮りなく物することゝはなりぬ。

先生の幼年時代は、多くの偉人が崛起するに當りて、殆ど必然なるかのやう、與つて力ある糟糠に泄れず、哀れしがなき家庭に生ひ長ち給ひし事とて、別にこれぞと取り立てゝ申べき數奇とてはあらざりしが、學問の道には苟旦ならず、厚く深き趣味を有たせられ、壯年時代に到りても、毎に獨立自營の道を人々に語り給ひしほどの熱誠もて、自營の道に肝膽を碎かれ、獨立の事業に憂身を窶し給ひしも、世の常人の如く學問を捨て給はず、却て益々奮ひ起されき。老年に及びては所謂『觀る物』、『聽く物』を一入嗜まれぬ、且つは庭園に樹木を植ゑ、盆栽花卉を愛せられ、必ず先づ學校の授業前に、自身の日課の如くにせられしといへば、先生は歌舞音曲の外に、少なからず園藝に趣味を有たれし人なり。或は錦魚を養ひ、小禽を飼ひ、栩々として無心に游ぐ態、喈々として晴朗に囀る聲を、看もし聞きもして眼を快ばせ、耳を娛ましめ、終日勤勞の疲れを慰め、以て氣を息むる唯一の資とはなし給へり。惟ふに是れ、先生の所謂、精神修養の道なりしなり。而して其外、先生の尤も好まれしは義太夫なりき、爾り先生は、寄席道樂の人にてありし。然れば月の内には十回以上、足を寄席へ運ばざることなく、時として日曜の折など晝席に赴き、其席にて生徒の試驗の點撿を爲されしことも度々にて、雜誌に黄卷に寄せらるゝ草稿の一部も、亦好きなる寄席にて物せられしこ

ともありしと。遊ぶこと必ず方あり、先生の好尚は、至つて平民的なりしなり、書齋を離れて悉く活きたる學問をなしたりと謂ふべし。

先生は壯年の時より、酒も煙草も嗜まず、平生人に語りて曰ふ、『如何に愼み深き人も、酒のためには血氣の勇に驅られ、我知らず粗暴の擧動を仕出來し、延いて平素の交際を破り、竟には大事なる生命にも關するものなれば拙者は飲まぬ』とて、斷然飽くまでも飲まざりけると、これ先生が而立歳前後の話なりしと。恁かる氣象の先生なれば、順一郎の祖父―世話好きの與七は、先生の俠氣と正直とを愛して、茂原市場に太物の商賈を開くべきことを勸め、明治四五年頃自ら多少の資本を支給し、一面には取引先も周旋して、月に六回の市に試みさせたるに、客の品物を買ふ者あれば、先生は必ず其客に對ひ、『何に使用するか』を聞き、さて正直に商ひ、律義一筋に縫ひ方を教へ、又は自ら裁ちて與へなどしたるため、其店大に繁昌したり

と、左もあるべし。先生は誠に正直者にて、昔氣質の眞面目に、至て親切なる人なりき。然れば一度、廳南小學校に教鞭を執りし時も、折々父兄の出校を乞ひ、面り裁縫教授の實況を見せしめ、良妻として社會に立つには、裁縫の技の必要缺くべからざるを說くこと、諄々として肺腑より表はれたりしかば、一家の妻君にして、未だその道を心得ざる者の、門に集りしも多かりしと云ふ。先生の熱心なる、斯の如きものありしなり。

何の比なりけん、先生一日、順一郎に曰へることあり。『自分が今日の成功は、謂はゞ僥倖なり。併し乍ら自身は僥倖に甘んぜず、一層進んで活動すべし。汝は決して僥倖を欲する勿れ、僥倖は何人にも望みて得らるゝものにあらず、只處念獨立を願へ。汝獨立の事業を望まば、あらゆる辛酸に打ち克てよ、而して出來得べくんば、成るべく多く配下を養生せよ。これぞ將來、汝が獨立の事業を助くる唯一の

味方にして、大勢力となる者ぞ』と。先生の達活識ある、言少しと雖、方しく處世の要を得たる活教訓といふべく、文天祥指南錄に、所謂『一片朝宗只此心』、『始知百錬是精金』とあるに較べて讓らざるべし。先生の如き大事業を成し遂げながら、敢て自己の手腕に歸せず、其功を僥倖に嫁して後生を訓ゆる處、識見の尋常ならざるを見るべく、寧ろ謙遜の德を欣慕すべきなり、而して先生、今や乃ち罔し。於乎、哀しからずや。

弔詞

早稻田大學有志者

こは當時、早稻田大學商科一年級中、左の諸氏より、故東京裁縫女學校長の令息渡邊滋君宛にて寄せられし弔詞なり。(編者)

早川欽介　大柴龜太郎　柿內四郎

吉原仁古　津田和助　山中鐵

山桝忠雄　青山鑛司　水野三治

兩角哲郎　杉浦義泰

鳥部山の煙、飛鳥川の淵瀨、常ならぬ世とはいへど、人の命ばかり果敢なきものはあらじ。明日ありと思ふ心の仇櫻も、夜半の嵐に散りぬるを如何にせん。我が親愛なる君の父君は、今や更に進で爲すべかりし遠大なる抱負を齎して、空しく白玉樓中の客となり給ひぬ。之れを耳にし、之れを知りし時の生等が悲痛の情は、實に譬ふるに物なかりき。之れを天に慟すれども及ばず、之れを地に哭すれども詮なし。冷酷なる無情の風は、此の地にも吹き荒びて、終に君が嚴君をば誘ひ奉りたるなり。嗚呼、哀しい哉、嗚呼、悼ましい哉。悲憤胸に塞り、血涙交下る。爰に謹みて蕪辭を呈して、以て弔詞となす。

弔詞

東京盲唖學校　唖生同窓會

裁縫界の明星たる渡邊東京裁縫女學校長逝くあゝ悼ましい哉。校長が裁縫界に貢獻せる功績につきては、世人の熟知せる處にして、吾人の喋々を要せずと雖も、吾人は校長が裁縫界に建てたる偉大の功績を憶うては、讃嘆の聲を放つを禁ずる能はざるなり。校長今や天壽を以て終ふ、社會の推賞と尊敬とを博せし校長にありては、些の恨なかるべしと雖、百歳の壽を重ねて、猶斯界に盡されむことを望める吾人にありては、大なる怨なきこと能はず。吾人は形體の不便なるよりして、直接に其恩惠に浴する能はざりしかども、間接に享受せし利益は、決して微少にてはあらざりき。然るに、無情の風は、校長を黄泉の底に拉取し去りて、本來空となし畢んぬ。あゝ、吾

（一五）列行儀隊の中間　五長過渡故

序

東京高等女學校　學生同窓會

盡瘁界の明星たる渡邊東京高等女學校長逝くあゝ惜まし哉。校長の墓碑界に貢獻せる功績につきては、吾人の熟知せる處にして、吾人の嘆々を要せずと雖も、吾人は校長が墓碑界に建てたる偉大の功績を偲うては、感嘆の聲を放つを禁ずる能はざるなり。校長今や天壽を以て終ふ、社會の推賞と尊敬とを博せし校長にありては、些の恨なかるべしと雖、百歳の遺を重れて、墓碑界に盡されむことを望める吾人にありては、大なる怨なきこと能はず。吾人は形體の不便なるとあるして、直接に其恩惠に浴する能はざりしかども、間接に享受せし恩惠は、樹して微少にては、あらざりき。然るに、無情の

人は、茲に校長の冥福を祈りつゝ慎んで弔詞を捧ぐ。

弔詞

京都菊花高等女學校

謹テ貴校長渡邊辰五郎氏ノ他界ヲ悼ミ、且ツ氏ノ技藝界ニ於ケル功績ニ對シテ敬意ヲ表ス。

明治四十年五月二十九日

渡邊先生を追悼す

高知縣同窓會

あはれ、いたましきかな。我等が師の君渡邊先生には、五月二十六日吹きすさぶ無常の風に、あしたの露と消え失せ給ひぬとや。海山幾百里を隔てたる身の、御柩の御伴にも加はり得で、いたづらに一堂

につどひたる海南同窓會員四十餘名は、涙に袖をしぼりつゝ、遙に東の空に懷を寄せて、玆に先生をしのびまつるになむ。

つら〳〵ありし世をおもんみるに、先生の東京裁縫女學校を起し給ひにし時よ。我邦の渾沌たる技藝界は、すたれにすたれ、あれにあれたる秋の野らの、たれ一人、鋤を入るゝものとてはなかりつるを、先生奮て其の任に當らせ給ひ、いくそばくの困難を凌ぎて、雄々しくも教の園を、うちひらかせ給ひけるに、その御惠の露に育ちて、續々卒業の實を結びたる我等がともは、既に萬をもて數へられ、今しもそが園に育てられつゝある大和撫子の數は、千が上にも上れりと聞く。世に成功の數はあれど、かばかり大なるものは又あるべしとも思はれず。わきてこの晩年には、いみじき計畫を立てゝ、ひたすら斯道の開發に御心を注がせられ給ひにしものを、空しく絶大の雄圖を齎して、溘然逝き給ひぬるは、ただに我等門生たりしものゝみかは、げに大方の世の嘆きとぞ知られし。今更たゝへまつらんとにはあらねど、先生の教授に御懇切なりしことよ。御心は溢るゝばかりの同情に富み、御教は燃ゆるが如く熱精に滿ちさせ給ひたれば、我等教へ子の敬慕は一方ならず、ただに師の君と呼び參らせむことのいかがはしく、なつかしき父君よと申し奉らむとこそ思ひしか。えうなきものは長らへて、徒なる命を貪れる世に、惜まるゝ人の、などかくさち厚からざるにや。蘭いよ〳〵芳ならむとして、忽秋風に摧かれ、月ます〳〵明ならむとして、はやくも浮雲に鎖さるゝかるをこそ浮世の習とは知りながら、こは又わきても恨めしの風なるよ。ねたましの雲なるよ。あゝ。

さはれ先生の御園の中に、おほしたてられし多くのわか苗は、日本のあらゆる隅々にまで移し植ゑられて、莖を出し、枝を分ち、幾千よろづの後の世まで、その種の布かれなむとするにぞ、かりにも技藝

の道のこの世にあらむ限り、先生の御名は永く歴史に傳へられて、つくる世とてはあらざるべし。願はくば、先生の御靈よ、たふとき天上の宮に迎へられて、神の御座に安らけく瞑目し給へよや。

弔詞

同窓會仙臺支部長　三島よし子

先生御遠逝ノ御訃報ヲ拜シ哀悼ノ至リニ堪ヘズ、謹テ弔意ヲ表シ奉ル。

明治四十年五月二十八日

弔詞

石渡角藏
石渡とり

裁縫界の泰斗として功績比類なき渡邊辰五郎先生の遠逝を悼惜す。

渡邊先生の永眠を哭す

東京裁縫女學校校編輯部　小森松風

先生は豫て化膿性腎臓炎に罹り、良醫の手を盡すと雖も衰弱甚しく、遂に本年五月二十六日午後五時五十分、六十四歳を一期として永眠せられしは、誠に斯界の爲め惜みても猶餘りありと謂ふべし。先生は人となり溫厚謹直にして、廣く世人の推服を受け、夙に裁縫學校創立者として、名聲天下に普く、晩年に至りては、成功の偉人として渇仰淺からず。思ふに本校の今日あるは、全く先生が創業の當時より、能く勤儉、誠實、忍耐の諸德を備へて、日夜精勵し給ひしに外ならず。而して先生は猶前途遠大なる志望を抱かせられしかば、此

際一日も長命ならん事を祈りて已まざりしものを。無情なる哉、天は先生に壽を許さず、病魔は烈しく先生の御身を責めて、溘然人界より奪ひ去りたる、何ぞ痛恨に堪へんや。爲に内は在校生徒千餘名の悲泣、抑ふる所を知らず。外は全國卒業生幾萬の痛嘆、察するに餘りあり。嗚呼先生は、今や幽冥境を隔てゝ、呼べども答へ給はず、訴ふれども聽き給はず。空しく北邙一片の煙、一基の墳塋と化し給ひて、今は唯朝夕、校門の御像に對して、其音容を追慕し奉る外なきなり。顧れば明治三十二年一月、本校舍の東竹町三十五番地に移轉するや、大に諸般の改革を行ひ、學科を增し、講師を聘し、目下一千餘名の生徒を教授するに餘りある大校舍の校長として、忠實に薫陶を垂れさせらるゝ時に當りて、俄然此訃音を傳ふるの已むを得ざるに至れるは、是れ實に終天の恨事たり。然れども先生は、天成の精力を發揮して、よく千古に功名を留め給へば、聊か以て心を寧んずるに

足る、とは云へ、本邦女子技藝界の唯一偉人を失ふ。嗚呼、噫、悲しい哉。

（丁未晚春五月二十七日夜稿）

歎文

本立院嗣法　石井勝溫

伏テ惟ミレバ、三觀ノ智水ハ湛然トシテ、法爾ノ性、嘗テ違ハズト雖、生死ノ岸頭、波浪常ニ起滅シ、一念ノ大虛、慧日隱ルゝコトナシト雖、隨緣ノ雲霧相往來シテ、更ニ止ムコトナシ。居士ハ弘化元年八月八日、千葉縣埴生郡長南町廿五番屋敷ニ生レ、幼ニシテ母ヲ失ヒ、家計給セズ、流離困頓シテ、垂齡既ニ浮世ノ落莫ヲ味ヒ、具ニ辛酸ノ極ヲ嘗ム。安政六年四月、志ヲ立テ江戸ニ來リ、晝ハ裁縫ノ業ヲ修メ、夜ハ力ヲ文ニ致シ、孜々トシテ倦マズ。明治元年業成リテ家ニ歸リ、子女ヲ集メテ教授シ指導倦マズ。遂ニ鄉黌ニ聘セラレ、鶴舞小學校ノ教

員ヲ兼ネ後千葉縣女子師範學校裁縫科教授トナリ、又東京女子師範學校ニ轉ズ。明治十九年ニ至リ女子職業學校ヲ創立シテ、夫人ト共ニ經營シ、後三十二年、東京裁縫女學校ヲ今ノ地ニ新築シ、諸般ノ經營更革スル處多ク、以テ盛名頓ニ馳セ、忽チ婦女學界ノ北斗トナリ、數々裁縫上獨創ノ考案ヲ出シテ、公衆ニ利便ヲ計ル、著書亦數部アリ、廣ク世ニ行ハル。是ヨリ贊ヲ取ルノ才媛、日ニ相踵ギ、門下ノ閨秀、漸ク海内ニ遍カラントス。世ノ居士ニ期待スル處、益々多キヲ加フルノ日、一朝病ニ臥シテ又起ツ能ハズ、去月廿六日遂ニ溘然トシテ逝ク、嗚呼悲哉。顧レバ、居士ガ一生其身ヲ困厄ノ中ニ處シテ、終始心ヲ淳善不動ノ地ニ置キ、以テ功業ヲ不朽ニ垂ル、是レ所謂、我家ノ勇猛精進ノ士ナリ。經ニ曰ク「俗間ノ經書治世ノ語言資生業等、皆正法ニ順ス」ト云フ、居士ノ成道、疑ヒナカル可シ、以テ瞑スベシ、希クバ饗ケヨ。（維時明治四十年六月二日）

弔狀

明治女學校學監　福迫龜太郎

渡邊校長御逝去ノ訃ニ接シ、驚愕痛惜ノ至リニ不耐候。御校御一同ニハ、誠ニ御愁傷ノ極ミト奉存候。然レドモ、隆盛ナル御校ノ基礎ハ、既ニ盤石ノ如ク堅ク、以後益々發展ノ著シキモノ有之、校長ノ尊靈モ、必ズヤ渡邊ノ莞爾タル御事ト恐察仕候ハバ、不取敢御悔ミ迄。

敬具

弔狀

高知縣須崎町女子實業補習學校　植田かめ　田中喜代

渡邊辰五郎先生には、久々御病氣の處、御養生不相叶御逝去の由實

員ヲ兼ネ後千葉縣女子師範學校裁縫科教授トナリ、又東京女子師範學校ニ轉ズ。明治十九年ニ至リ女子職業學校ヲ創立シテ、夫人ト共ニ經營シ、後三十二年、東京裁縫女學校ヲ今ノ地ニ新築シ、諸般ノ經營更革スル處多ク、以テ盛名頓ニ馳セ、忽チ婦女學界ノ北斗トナリ、數々裁縫上獨創ノ考案ヲ出シテ、公衆ニ利便アリ、廣ク世ニ行ハル。是ヨリ贊ヲ取ル人多ク、日ニ相踵ギ、門下ノ閨秀、漸ク治内ニ遍カラントス。世ノ居ル所ト期待スル處、益々多キヲ加フルノ日、一朝病ニ臥シテ又起ツ能ハズ、去月廿六日遂ニ溘然トシテ逝ク、嗚呼悲哉。顧レバ、居士ガ一生其身ヲ困厄ノ中ニ處シテ、終始心ヲ淳善不動ノ地ニ置キ、以テ功業ヲ不朽ニ垂ル、是レ所謂、我家ノ勇猛精進ノ士ナリ。經ニ曰ク「俗間ノ經書治世ノ語言資生業等皆正法ニ順ス」ト云フ、居士ノ成道、疑ヒナカル可シ、以テ瞑スベシ、希クバ饗ケヨ。（維時明治四十年六月二日）

弔狀

明治女學校學監　福迫龜太郎

渡邊校長御逝去ノ訃ニ接シ、驚愕痛惜ノ至リニ不耐候。御校御一同ニハ、誠ニ御愁傷ノ極ミト奉存候。然レモ、隆盛ナル御校ノ基礎ハ、既ニ盤石ノ如ク堅ク、以後益々發展ノ著シキモノ可有之、校長ノ尊靈モ、必ズヤ彼岸ニ莞爾タル御事ト恐察仕候。先ハ右、不取敢御悔ミ迄。

敬具

弔狀

高知縣須崎町女子實業補習學校　植田かめ　田中喜代

渡邊辰五郎先生には、久々御病氣の處、御養生不相叶御逝去の由、實

に驚愕の至りに奉存候。茲に謹て御弔詞申上候。

弔　狀

前田縫子

豹は死して皮を留め、人は死して名を殘すとは、兼て聞き及ひ候處、其後そを思ひ出す毎に、恩師渡邊先生を思ひ出し、敬慕の念とゞめがたく候。妾久しく先生の膝下に跪き、御懇篤なる御薫陶を相受け候折にも、其非凡にして且つ熱心なる御性行は、屢々妾を驚かし申候。先生の御身を裁縫に委ね給ふや、常に勉めて屈する色なく、御聰明の腦髓は、事物に逢ひ直に疑念を起し、その根底に達せずは止まじとの御性質、其結果遂に我邦裁縫界の泰斗と仰がれ給ひて、今や御尊名は何處に至るも芳はしく、妾迄も大にそを誇るを得べき光榮に浴し申候。是れ全く堅忍不拔の御精神に基くものと、只管感激

に不堪候。然るに悲哉、天は無情、かゝる御功勞の顯著なる渡邊先生は、一朝病の床に臥し給ひてより、多くの人の心づかひも其甲斐なく、遂に此世を辭し給ふ、誰か哀悼せざるもの御座候べき。殊に我裁縫界の前途益々多忙なるの時、其泰斗を喪ふの悲み、何に譬へ申すべき、惜みても猶餘りある事と存候。されど其御遺業と御功績は、長く後世に傳へられ申すべく、功成り名遂げて身を退くこそ何の遺憾も無之、尚餘榮あるものと信じ候。今や先生の追悼錄御編纂に當り、聊か追悼の意を表し、茲に弔詞を捧げ申候。冀くは御靈前に御供へ被下度候、謹言。

弔　狀

千葉縣佐原裁縫女學校長　井上はな子

御恩海山も啻ならぬ尊師、渡邊先生の御訃を承りしは、斯世の事と

も思はれぬ程に候ふかな。先生は唯に、妾等の技藝上の恩師たりしのみかは、御德操の堅實、崇高なりし御ことは、誠に妾等が心靈上の嚴師に候ひき。

されば妾等、朝夕に御惠みの深きを畏み、いつかは萬一に報い奉らんと、心のみはやりつる間に、ゆくりなくも幽明を隔て奉るに至り候ひしは、悲歎これに勝るものありとも思ひ候はじ。茲に恭しく弔辭を述べ、不敏の罪を謝し奉り候ふ。

明治四十年六月二日

弔狀

熊本縣阿蘇郡宮地裁縫女學校長　神山九平太
同　えつ子

富士が峰の高きや、琵琶の湖の深さにも勝りし恩師、渡邊辰五郎先生の御訃音を承り、たゞ夢心地にて、眞の事とは思はれぬ程に候。天道は是か非か、斯道の大明星たる御德操の堅實崇高にして、社會の推賞と尊敬とを博し給へる、功績偉大の先生に、百歲の齡を假さず、何しに無情の風は、黃泉の底に拉し去りしぞ。嗚呼悲しい哉、嗚呼悼しい哉。寔に悲哀の情に堪へず候。謹みて弔辭を述べ奉る。

弔狀

吉野錦子

我國裁縫界の泰斗と仰がれ給ひし渡邊辰五郎先生の身まかり給ふと聞くは眞に候や、妾事、海山遠く隔たれる鄙の片山里にわび住まふ者とて、未だ先生の音容に接したることゝては御座なく候へ共、かねて御高名の程は拜承仕り居り、殊に御著書の裁縫教科書は、此年ごろ拜讀し居るのみならず、都の内にかくれなき其學び舍を

出でさせられし、教子の君たちにも打交りつるに、いよ〳〵斯道の奥がを極めさせらるゝ由なれば、先生に對する其信念と敬意は益々高まりゆきて、一日も長く現世におはして、妾等の道しるべせさせ給へと、朝な夕なに祈り居り候ものを、人生朝露の歎は如何ともする能はず、遂に亡き人の數に入り給ひぬとは、まことに悔みても歎きても詮すべなく、唯た天に向つて其無情なるを打ちかこつのみにて候、あはれ悲しきかな、悼ましきかな、茲に謹しみて弔詞を申上げ候、かしこ。

弔狀

萩岡あき子

千代もと祈りしかひもなく、我等が杖柱ともたのみまつりし校長の君の御訃音を承るかなしさ、夢現とも覺えぬ程にて候。さても先生の御幼時は艱難辛苦の中におひたゝせ給ひ、ゆきて學ぶ學校なく、つきて習ふ良師も少かりし時に於て、一意專心裁縫の道に御心を注がせられ、遂に裁縫學校を御設けなされてより、遠近を問はず來り學ぶもの日々に增加し、今日の如く盛大に相成候由、御高德の程實に敬慕に堪へず候。左候へば先生の御最後は、何の御心殘りも無く、いと安らけくて逝かせられ候はめど、我等教へ子の身として は、其悲しさ胸にみち〳〵て、いひ出づべき言の葉も覺えず候、只涙もて謹みて御弔辭を申上候。あなかしこ。

弔狀

濱野智惠子

恩師渡邊辰五郎先生御逝去の趣、萬朝報紙上にて拜承、實に驚き入り候。さても御一同の御愁傷、さこそと御察し申上候、わが技藝界の

偉人にましませる先生の御逝去は、一天暮れて日月の光を失へるが如く、萬人の悲歎、父母の喪に逢ふに、いやまさるもの之れ有り候、ことに御生前中、淺からぬ御薫陶を受けし妾が身に取りては、一しほ哀悼の情に堪へず候。妾は常に先生の御惱裏の純潔にして廉直なること、恰も白玉の微暇なきが如く、高潔にして清淨なること、宛ら照魔鏡の如くなるを御慕ひ申居候、なほ忍耐力の強くまし〳〵て、百難前に塞り、萬艱後に襲ひ來るも、克く之を排除して、遂に今日の如く大業を成就し給ひしは、全く世人に好模範を示し給へるにて候、先生常にのたまふ樣「勤勉するものは、時の貴ふべきを知る、これを知るものは、必ず効果の貴ぶべきものあるを知るが故に、遂に希望の岸に達するものなり、」と。嗚呼先生は、永久の訓言を殘して、不歸の客となられ申候、茲に謹みて弔詞を奉り候、かしこ。

弔辭

東京裁縫女學校教員總代　天貝さく子

あはれ先生は、五月廿六日を以て遂になき人の數に入りたまひぬ。先生の德を仰ぎ、先生の術をしたひまつりて、長くみそばに侍り、親しく教を蒙むる我等今後は先生は後れまゐらせて、暗路に燈を失へる思ひ、我等が胸の中に宿しまつれる、今は形見のなつかしの面影はあれ、天涯底に止めたまへる、今は形見の嬉しきみおとしよ。かれを思ひ、これを思へば、悲しとも口惜しとも、口に述べかたく、筆に盡しがたしさはれ、先生が一生の心血をそゝぎたまへる全國無比の學校は、かしこにあり。日々子としていつくしみたまへる、一千の生徒はこゝにあり。先生今や、あの世に去りませども、先生の精神はとこしへに亡びず、遠く我等を導きたまふら

偉人にましませる先生の御逝去は、一天暮れて日月の光を失へるが如く、萬人の悲歎、父母の喪に逢ふに、いやまさるもの之れ有り候、ことに御生前中、淺からぬ御薫陶を受けし妾が身に取りては、一しほ哀悼の情に堪へず候。妾は常に先生の御懺裏の純潔にして廉直なること、恰も白玉の微瑕なきが如く、高潔にして清淨なること、宛ら照魔鏡の如くなるを御認め申居候、なほ耐力の強くまし〳〵て、百難前に塞がり艱苦襲ひ來るも、克く之を排除して、遂に今日の如く大業を成就し給ひしは、全く世人に好模範を示し給へるにて候、先生常にのたまふ樣、勤勉するものは、時の貴ふべきを知ること、れを知るものは、必ず効果の貴ぶべきものあるを知るが故に、遂に希望の岸に達するものなり、と。嗚呼先生は、永久の訓言を殘して、不歸の客となられ申候、茲に謹みて弔詞を奉り候、かしこ。

弔辭

東京裁縫女學校教員總代　天貝さく子

あはれ先生は、五月廿六日を以て、遂になき人の數に入りたまひぬ。先生の德を仰ぎ、先生の術をしたひまつりて、長くみそばに侍り、親しくみ教を蒙れる我等、今俄に先生に後れまゐらせて、暗路に燈を失へる思あり。あはれ、我等が胸の中に宿しまつれる、今は形見のつかしの面影よ。あはれ、我等が耳の底に止めたまへる、今は形見の嬉しきみさとしよ。かれを思ひ、これを思へば、悲しとも口惜しとも、口に述べかたく、筆に盡しがたし。さはれ、先生が一生の心血をそゝぎたまへる全國無比の學校は、かしこにあり。日々子としていつくしみたまへる、一千の生徒はこゝにあり。先生今や、あの世に去りませども、先生の精神はとこしへに亡びず、遠く我等を導きたまふら

む。我等はたゞ先生の精神を力に、ひとしほ斯道にいそしみはべりて、高恩の萬分の一に報いまつらむのみ。仰ぎ願はくば、先生の精神よ、とはに我等を導きたまへかし。

明治四十年六月二日

弔辭

東京裁縫女學校生徒總代　野村なか子

思はざりき、今日かゝるみにはに、八千代にませと祈りし、わが師の君を送りまつらんとは。

あゝ師の君、おほくの年月、たちぬひの業、奥ふかくきはめ給ひ、朝夕教の庭におりたちて、いとねもごろに、深きいつくしみもて、うまずたゆまず、拙きをもすてたまばず、もどかしきをもいとひ給はで、導かせ給ひしみめぐみを仰ぎまつりて、親の如くしたひたのみまゐらせしを、あゝうつせみの世の、たのみがたさよ。しばしの御いたづきと思ひの外に、とことはにかへらぬたびにおもむかせ給ひぬ。あはれ幽冥途とほし、いつの世にか、まみえたてまつるを得べき。なつかしき御おもかげ、まのあたりなる心地。されど更に御聲だに聞きまつるによしなし、今はいかにせん、道のしをりを失ひぬ。あゝ今日のかなしさ、涙おちて心暗く、愁結んで言短し。今はた、何事をかは聞えあげん。たゞわきかへるあつき涙かきはらひ、一言おなじめぐみの露うくるものに代りてかくなむ。

明治四十年六月二日

弔辭

東京裁縫女學校生徒　溝口シヶ子

春去リ花散リテ、哀レ寂寞身ニシミタリ。維時明治四十年五月廿六

日、妾等ガ恩師渡邊辰五郎先生身罷リ給ヒテ、彼ノ世ノ人トナラレヌ。嗚呼悲哉、嗚呼悼哉。妾等千百ノ學生ハ、先生ヲ父トモ仰ギ、母トモ賴ミ、妾等ノ多クハ、親シキ生ミノ親ヲ離レ、懷シキ故郷ヲ後ニシテ、遙ニ先生ヲ慕ヒ、遠ク笈ヲ負フテ東京裁縫女學校ノ教ヘノ庭ニ入リ、朝ニ先生ノ慈眼ヲ拜シ、夕ニ先生ノ溫容ニ接シ、山ヨリモ高キ教訓ト、海ヨリモ深キ愛撫ヲ受ケ、只管斯道ニ勵ミケルニ、今ヤ先生逝キ給ヒテ、唯暗夜ニ燈火ヲ失ヒシガ如ク、仰テ天ニ叫ベト天答ヘズ、伏シテ地ニ哭セド地應セズ、愁傷悲嘆、衣襟ノ濕ルヲ覺エザルナリ。回想スレバ三十年ノ昔、先生ニハ吾國女子技藝教育ノ振ハザルヲ嘆キ、獨力私塾ヲ開カレテヨリ一意專心、斯道ノ爲メニ盡サレ、日本在來ノ裁縫術ヲ改良シテ、之レニ深遠巧緻ナル學說理論ヲ調和シ、更ニ歐米裁縫ノ特長ヲ加味シテ、茲ニ渡邊式裁縫術ヲ創見シ、親シク之ヲ教授セラレシガ、其成績年ト共ニ著シク、恰モ小サキ樫ノ實

ガ、年ヲ經テ鬱蒼天ニ聳ユル大木トナル如ク、其校運ハ益〻盛ニ、生徒ハ愈〻加ハリ、現ニ卒業生三百六十有餘ノ篤志者ハ、海內各地ニ散在シテ、斯道教育ニ從事シ、校內又一千ノ通學生ヲ有スル盛況ヲ呈シ、吾ガ裁縫女學校ハ、唯ニ東京ニ於ケル一大女學校ナルノミナラズ、實ニ世界有數ノ裁縫女學校トシテ許サルヽニ至リシハ、全ク先生ノ宏大ナル德望ト、該博ナル學識ト、堅固ナル精神トノ致サレシ所ニシテ、更ニ先生ガ世ニ憫レナル孤兒ヨリ生ヒ立チ給ヒ、アラユル辛酸ヲ嘗メ、螢ノ光、窓ノ雪、備サニ苦學ノ難ヲ積ミ、終ニ能ク吾國裁縫界ノ泰斗ト仰ガレ、名譽ナル女子教育ノ大家ト敬セラルヽニ至リ給シハ、誠ニ立志篇中ノ偉人トシテ、幾久シク世人ノ欽慕スルトコロナリ。嗚呼先生ハ、妾等女子ノ爲ニ此世ニ生レ給ヒ、學校ヲ家トシ、妾等生徒ヲ子トシテ、其一身ヲ教育ニ委ネ、高ク清ク尊キ天職ヲ全フシテ永眠セラレシガ、先生ノ功績ハ萬代不朽ニ傳ハリテ、吾國

裁縫術ノアラム限リ、御名ノ記憶セラルヽヲ思フ。今ヨリ後、妾等ハ校門ヲ出入スル毎ニ、恩アリ威アル先生ノ銅像ヲ拜シテ、其遺訓ヲ追想シ、善良ナル生徒トナリテ、學ヲ勵ミ藝ヲ習ヒ、他日業成ルノ後、先生及母校ニ蒙ル恩澤ノ萬分ノ一ニ報ゼムトス。黄泉途杳カニ、幽冥遠ク相隔ツレド、神靈尚クハ、サヤカニ聞召セ。謹ンデ哀腸ヲ表シ、恭シク弔辭ヲ述ブルニナン。

恩師渡邊辰五郎先生を悼む

千葉縣匝瑳郡福田町私立鍼綾女學校長　平山とみ子

女子教育界の大偉人として、吾國裁縫界の泰斗として、且夕敬慕の念に堪へざる恩師、渡邊先生逝き給ふ。妾の先生に教を受けたるは、明治二十三四年の交なりき。當時生徒八十餘名、その頃先生の卓見は、裁縫が一の科學として、他の學科の如く之を理論的に排列し、一齊的に教授することを得と云ふにありて、これが考案は、必ずや近き將來に於て、一般に普及するの時來るべしと豫言せられたるに、未だ幾年ならずして、其言の實現せらるゝに驚けり。又先生は當時、妾等に告げ給ふに、予未だ本心、實業に從事するものを造らず、今後の社會は、實力の腕と理論の腦とを兼ね備ふるものを要するに至るべしと。其後暫くにして女子實業教育の聲世間に高く、技藝學校の益々多きを見る。茲に於て妾は、先生の女子教育界に對し、先見の明あるに愈々驚けり。明治二十五年、妾が下谷區池の端に裁縫教授所を開設せんとして先生に謀るや、先生大に其擧を賛し、其親戚熊谷家に妾を紹介して、陰に陽に共に幇護の力を垂れ賜ひ、妾をして意外の成功を得せしむるもの、其愛情の切なるに因らずんばあるべからず。今なほ感泣、忘るゝ能はざる所なり。

明治三十年妾は、鄕里有志の迎ふる所となりて下總の野に歸り、今

の女學校を開設せんとして、復之を先生に謀るに、先生大に喜び、地方に於て事業を爲すの心得、數件を授けらる。爾來十年、妾の營める學校の事業の、年と共に益〻盛なるは、妾の事業の後には、必ず先生の影の伴ふあるを以てなりと信ず。妾が如上の御鴻恩に酬い奉らんがため、毎年一回、若くは二回、必ず先生を訪うて、其音容に接するを例となしたりしに、本年は未だ其志を遂げずして、圖らずも其葬に會するの不幸を見るに至れり、嗚呼悲哉。妾は十數年來、先生の志を勞したること若干なりしを知らず。然るに未だ之に酬ゆる所なきを悲しむの餘り、茲に數言を叙して、一は以て先生の御高德を頌し奉り、他は以て追悼の誠を致すと云爾。

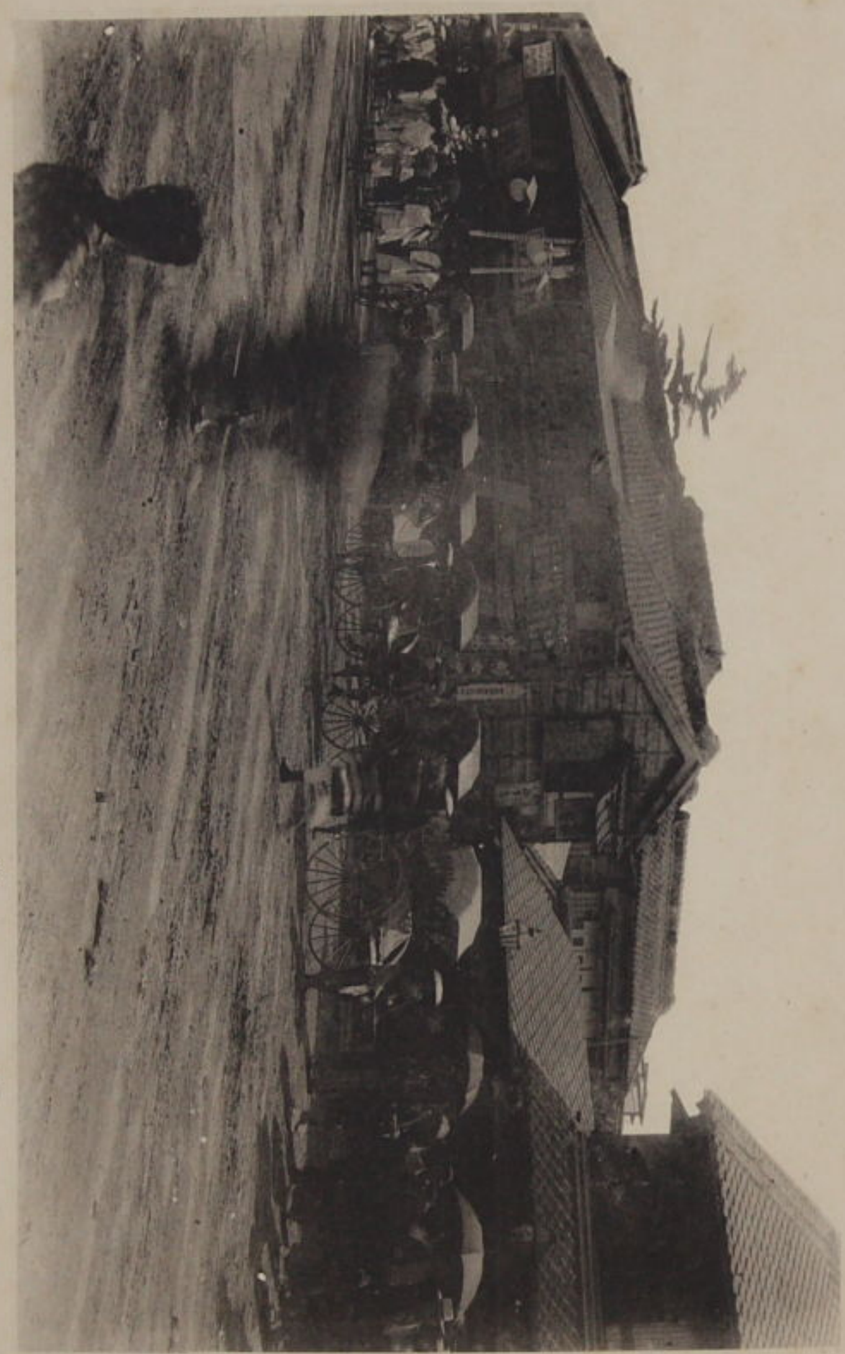
師の君の逝き給ひしを惜みて

在臺灣淡水土名烽火街　深井はつ子

の女學校を開設せんとして、復之を先生に謀るに、先生大に喜び、地方に於て事業を爲すの心得、數件を授けらる爾來十年、妻の歎めるも學校の事業の、年と共に益々盛なるは、妻の事業の後に出ずして先生の影の伴ふあるを以てなりと信ず、妻が如上の御厚恩に酬い申さんがため、毎年一回、若くは二回、必ず先生を訪うて、其晉容に接するを例となしたりしに、本年は未だ其志を遂げずして、國ちずも其事に會するの不幸を見るに至れり、嗚呼悲哉妻は十數年來先生の志を勞したること若干なりしを知らず、然るに未だ之に酬ゆる所を きを悲しむの餘り、茲に微衷を述して、一は以て先生の御高德を謝し奉り、他は以て追悼の誠を致すと云爾

師の君の逝き給ひしを悼みて

在臺灣淡水土名烽火街　深井以つ子



（二　其）　例　行　儀　弊

回顧すれば過ぎつる年、妾御校に教を受けし時、師の君の語り給ひしこと、又遊ばしたること共、くり返し〳〵忍び奉り、殊に師の君には、御幼少の時より裁ち縫ふ業に御心を寄せられ、其始め實地御研究遊ばす時などは、寢食も御快よく遊ばされず、或は夜更けて眠氣を催す時などには、裁盤の上に其儘打伏し、暫時御目を休ませられ、直ちに又御眠をさまさせられて、裁ち縫ふ業に怠りなかりしとか。故に糸こき劇しきため、冬季などには指先割れ、血しほの流るゝこと常なるも、夫等は敢て御心にも止めさせられず、一日に數枚の衣服を仕立上げ居られしとか。また其後は、我國一般に裁縫術の進歩せざるを御歎き遊ばされ、始めは御自宅にて私塾を御開き遊ばし、世の子女をして此道に導かれ、傍ら當時未だあらざる裁縫教科書なるものを世に公になし給ひ、普く世の裁ち縫ひの道に稗益せられ、以て今日の如く斯道の發達を促されしなど、其功少なからず。賤

しき妾等に至りても、親しく其御教訓を蒙るを得しは、實に師の君の御鴻恩にて、千尋の海も萬尺の山も譬ふべからず、誠に敬慕の念に堪へざるなり、思へば〳〵師の君には、斯くも御慈愛深き御心以て、專ら子女を教育なし給ひし功は、千歳朽ちず。今や我國は謂はずもあれ、外國までも師の君の御惠みの及ばざるはなく、實にわが國裁縫界の泰斗として、山間僻地に至るまで、皆人の敬慕せざるはなきに至り給ひぬ。

然るに天は無情なる哉、師の君の未だ六十路あまり四つを越えさせ給ひし御齡なるにも拘はらず、空しく黄泉の客となられ給ひし事の殘念さ、悲しさ謂はん方なく、實に師の君を失ひしは、妾等婦女に取りて、上なき一大不幸なり。裁ち縫ひのわざにありては、さながら暗夜に燈火を失ひしに等しく、悲歎措く能はず、嗚呼悲しい哉。あはれ師の君、今や幽冥遠く隔たると雖も、神靈尚くは、妾平素の罪を

赦され、妾の意の在る所を察せられて、永久にみ教へを垂れさせ給はん事を、茲に謹みて弔辭に代へ奉る。

恩師渡邊辰五郎先生の逝去を悼みて

伊豆　渡邊よし子

あわれ、我師渡邊辰五郎の君は、裁縫界の父として、世にうやまはれ、人にしたはれ、教の道に身を委ねられてより、數多の子女を導き給へること、茲に幾春秋ぞ。わきて教科書は、ながき年月、いくそ度か、改良に改良を加へてものしたまへる、いと懇なるものなりければ、學校に家庭にもてはやされて、今は師の流をくむものことに多し。かれば世の進歩とともに、この道のさかえませるもいとしるくして、君が功は、はた長へにくちざらんとす。さるを天、君に壽をかざず、いぬる頃、かりそめの御いたづきより、人々の心づくしも其甲斐な

くて、あはれ血になくほとゝぎすに、現世のゆめを破りて、あへなく天にのぼり給ひき。あはれ、なつかしのみすがた、いつの世にかは拜しまつらん。つひに逝く道とはかねてきゝしかど、實にきのふけふとは思はざりしを。あゝ悲しいかな。

七二

弔詞

大籔たき子

渡邊大人、常に女子教育にみ心をかけさせ給ひ、世人に先だちて裁縫學校を東京に設けられ、これまで數千の生徒を教へ導き、幾多の裁縫教員をその門より出して、世の中に幸をあたへ給ひしこと、そもいかばかりぞや。もはや大人のまごゝろは、全國にあまねくゆきわたり、如何なる田舍にても、裁縫學校の必要を感ぜざるはなきまでに至りたるは、誠に大人の恩澤にもとづくものとこそ云ふべけれ。然るに、去ぬる月よりいたづきの床につかせられて、くすしの藥も其甲斐なく、五月二十六日を名殘に消えて、歸らぬ烟とならせ給ひぬ。嗚呼、惜しみてもあまりある師の君にておはする哉。

天は無情

東京裁縫女學校　大岡房江子

いぶせき雨雲は今日も立ち覆ひぬ、幾日降りづゞくらんと指かゝなへば、はや五日餘りにぞなりぬる。つれ〴〵なるまゝに、ひとり文机にむかひ居たるに、心はいつしか故校長の君の御上にうつりぬ。我等師の君を慕ひて、はる〳〵都に上り、親しく御教へを受くるに至りし時の嬉しさよ。御教授の度毎に、やさしき御聲もて、懇にさとし給ふ御言の葉の身にしみて、一週一度の御講義を待ちわびたりしものを、かなしきかな、未だ一月を經ぬ中に御病氣の床につき、日

ましに重らせ給ふさはいへ日頃御健やかなる御身なれば、程なく御全快に至らせ給ふべしと頼みなき頼みをかけつゝ、只管一日もはやくいえさせ給へかしと祈りし甲斐もなう、遂に五月廿六日を以て、永き眠につかせ給ひぬるぞ悲しき。あゝ懐しの師の君よ、と慕ふ教へ子を殘しおきて、死出の旅路にいでたゝせ給ひしぞ悼ましき。あゝ天は無情。かく無情なる天は、我等に憂き目を見せんとてか、はた天つ神は、師の君の御才徳を愛づる餘りに御傍近く召し寄せ給ひにしか。げに御教へを受けし日は淺けれど、御高恩のほどを思へば、雲にそびゆる富士の峯よりも高く、そこひも知らぬ大平洋よりも深し。されば益々斯道の發達を計り、此校の名を擧げんことこそ、今後我等が御恩の萬一に報い奉るべき業ならめ。徒らになげきてのみあるべきかは、と強ひて心を勵ませども、なほ追慕の涙に袖のひる間もなきを、外面の方にては雨いよゝはげしく降り來りぬ。

寫眞の禮狀

私立丸龜和洋裁縫女學校長　鹽津つね子

拜呈、此頃は早速御玉章賜はり、誠に有り難く御禮申上候。私事、豫て申上候通り、去る本月二日は、御葬式の日と承り候故、本校にて、ただ意ばかりの追善御廻向申上候。その狀況は、別紙の新聞に記載有之候間、御覽被成下度候。

さて、這回御寫眞有り難く頂戴致候。この御寫眞到着せしは、二日午前八時前にて、右法會の師、御寺樣方、將に御讀經に御掛りなさらんとせし時にて、思ひ掛けなき何よりの御品、殊に最近の御撮影にて、私は生前の先生に御目に掛りし心地致候。餘りの嬉しさに、つら〳〵拜見致居候内、海岳の高恩を受けし先生は、最早此世におはさずや、唯一言なりと御言葉承りたし杯と、愚痴を

門生　つねぶ
寫寄書　ちゝ